

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第27集

市内遺跡発掘調査概要報告書Ⅲ

日向国分寺跡

1 9 9 8

宮崎県・西都市教育委員会



A区 主要伽藍西門南北溝(SE002)検出状況(北より)

序

西都市教育委員会では、平成7年度から国庫補助を受けて、日向国分寺の伽藍配置確認調査に伴う市内遺跡の発掘調査を実施しておりますが、本書は平成9年度に発掘調査した箇所の概要報告であります。

今回の調査は主要伽藍配置の西辺中央部と北東部分を中心に行いました。中でも西辺中央部分からは溝状遺構の他に、西門と推定される遺構が確認され、このことにより中門以外にも門があることが判明しました。また、この溝状遺構内には多量の瓦や土師器が混入し、溝中には完形の瓦も含まれており、貴重な資料となりました。

これらの遺構等は、日向国分寺跡解明のためには極めて重要なものであり、大きな成果をあげることができました。

本報告が専門の研究だけでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識を得るための資料となれば幸いと存じます。

尚、調査にあたってご指導・ご協力頂いた調査指導員の先生方、宮崎県教育庁文化課をはじめ、発掘調査に携わって頂いた方々、並びに地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成10年3月31日

西都市教育委員会

教育長 平 野 平

例 言

1. 本書は、西都市教育委員会が国庫補助を受けて、平成9年度実施した市内遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 平成9年度の確認調査は、西都市大字三宅字国分に所在する日向国分寺跡の5ヶ所を対象に行った。調査は開発事業に伴う発掘調査が急遽入ったため、平成9年6月17日から平成10年3月6日までの長期間になった。
3. 発掘調査は、西都市教育委員会が主体となり実施した。
4. 調査及び図面作成等については、蓑方政幾・釜瀬明宏が担当した。
5. 本書の執筆・編集は、釜瀬明宏が担当した。
6. 本書に使用した方位はFig.1・2は平面直角座標系第Ⅱ座標系であり、Fig.3～8は磁北である。この地点の磁北は真北より $6^{\circ}20'$ 西偏している。
7. 本書に使用した標高は、海拔絶対高である。
8. 遺物、土層に用いた色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修の『新版標準土色帳』に準拠した。

目次

第I章. 序章	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の体制	1
第II章. 遺跡の位置と歴史的環境	2
第III章. 調査の概要	3
第IV章. 遺構と遺物	
第1節 遺構	6
第2節 遺物	9
第V章. まとめ	14
報告書抄録	

挿図目次

Fig.1 日向国分寺跡周辺位置図	Fig.6 C区遺構実測図(S=1/200)
Fig.2 日向国分寺跡現況平面及び トレンチ配置図(S=1/1,000)	Fig.7 D区遺構実測図(S=1/200)
Fig.3 A区南北溝(SE002)北壁土層断面図(S=40/1)	Fig.8 E区遺構実測図(S=1/200)
Fig.4 A区遺構実測図(S=1/100)	Fig.9 A区南北溝(SE002)出土土器実測図
Fig.5 B区遺構実測図(S=1/200)	Fig.10 A区南北溝(SE002)出土瓦実測図

表目次

Tab.1 出土土器観察表	Tab.2 出土瓦観察表
---------------	--------------

図版目次

PL.1	
1. A区西門柱穴検出状況(北東より)	2. A区南北溝(SE002)北壁土層断面(南より)
3. A区南北溝(SE002)遺物検出状況(東より)	4. B区第2トレンチ遺構検出状況(北東より)
PL.2	
1. B区第1・3トレンチ遺構検出状況(南より)	2. C区第1トレンチ遺構検出状況(西より)
3. D区第1トレンチ遺構検出状況(南西より)	4. D区第1トレンチ遺構完掘状況(南西より)
5. E区遺構検出状況(西より)	
PL.3 A区南北溝(SE002)出土土器	PL.4 A区南北溝(SE002)出土瓦

第 I 章. 序 章

第 1 節. 調査に至る経緯

日向国分寺跡の調査は昭和23(1948)年に、団長を東京大学駒井和愛助教授、主として早稲田大学で組織された日向考古調査団によって、また、昭和36(1961)年には齋藤忠博士及び九州大学教授鏡山猛氏らを中心とした県教育委員会によって実施された。

その後、平成元年度に県教育委員会により確認調査が実施されているが、僧坊跡（平成元年度調査）と推定される遺構以外には、その主要伽藍配置について明確にされていない。さらに、当時の報告書の周辺写真と現在では寺域内外の宅地化が著しく、畑地や空き地の確保も困難であり、伽藍配置の確認が急務であった。

このようなことから、西都市教育委員会により平成7年度から国庫補助を受けて、主要伽藍配置等の確認調査を実施することとなった。

尚、調査は区画整理事業に伴う遺跡所在確認調査を実施する予定であったが、区画整理事業の実施が延期、また、条件的に調査の進行が困難になったことなどの理由から、日向国分寺跡に限定して実施することになった。

第 2 節. 調査の体制

調査主体

教 育 長	平 野 平
社会教育課長	佐々木 美 徳
同 文化財主事	日 高 憲 一
同 主 事 補	原 口 和 盛

調 査 員	同 文化財係長	蓑 方 政 幾
	同 主 事 補	釜 瀬 明 宏

調査指導員	日 高 正 晴 (西都原古墳研究所)
	柳 沢 一 男 (宮崎大学教育学部教授)

第II章．遺跡の位置と歴史的環境

西都市街地の西方には標高50～80mの通称西都原(さいとばる)と呼ばれる台地がある。台地上には柄鏡形式の前期古墳を含む前方後円墳30基・方墳1基・円墳278基の大小古墳で構成された特別史跡・西都原古墳群が所在し、また、南九州独自の埋葬形態を有する地下式横穴墓も12基確認されている。

この西都原台地は、九州山地から南南東に向かって舌状に細長く伸びた洪積世台地で、その南端には産土神の三宅神社が創建している。

神社から急坂を下ると、上尾筋・下尾筋遺跡の所在する標高30m程の中間台地になり、さらに下ると標高12m程の沖積平野へとつながっている。

日向国分寺跡は、その中間台地の北方、北・東側は断崖、西側は西都原台地、南側は谷地形に挟まれた地域に位置している。また、北方600m程の妻高等学校敷地内には同尼寺跡も保存されており、本地域は歴史的にも価値のある、重要な地域となっている。

また、国分両寺は国府の近くに置かれるのが全国的な通例であったが、現在国府の推定地となっている地域を平成元年度に県及び市教育委員会で試掘調査を行ったが、わずかな布目瓦のみしか検出できなかった。結果的には、弥生時代を中心とした集落跡が確認され、また、前方後円墳5基を含む古墳20基（特別史跡・西都原古墳群）も所在していることから、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡所在地域として位置づけられる。

上記の日向国府跡については、現推定地(上尾筋地区)の他、右松地区及び寺崎・法元地区など幾つかの候補地があげられている。しかし、昭和63年度から実施されている県教育委員会による国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査及び範囲確認調査、市教育委員会による遺跡所在確認調査により、多量の布目瓦に加え回廊跡と推定される遺構、掘立柱建物跡などが寺崎・法元地区より検出された。このようなことから、本地域が日向国府跡の有力な候補地として浮上してきた。

さらに、昭和63年度平田・堂子丸新道路建設に伴う酒元遺跡発掘調査においては、古墳時代中期中葉から後葉、つまり、男狭穂塚・女狭穂塚が築造された時期頃の集落跡が検出されており、西都原台地上はもちろん、日向国分寺跡を含む中間台地は古代日向国の中心的な役割を果たしてきた歴史的な環境をもつ地域であったと思われる。

(註)

- (1) 松本 昭「宮崎県日向国分寺」『日本考古学年報』I 日本考古学協会編纂 1949
- (2) 宮崎県教育委員会「日向国分寺趾」『日向遺跡総合調査報告』第3輯 1963
- (3) " 『国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査報告』Ⅲ 1991
- (4) 西都市教育委員会「遺跡所在確認調査に伴う市内遺跡発掘調査概要報告書」
『西都市埋蔵文化財調査報告書』第23集 1996
- (5) " 「市内遺跡発掘調査概要報告書Ⅱ」
『西都市埋蔵文化財調査報告書』第25集 1997

第Ⅲ章．調査の概要

日向国分寺跡については、前記のとおり、昭和23年に駒井和愛を団長とする日向考古調査団が、また、昭和36年及び平成元年度には県教育委員会が確認調査を実施している。昭和23年の調査地点については、資料不足のために明示できないが、昭和36年分については、旧堂宇いわゆる五智堂及びその南側を中心に、平成元年度については寺域の北側にあたる部分（中央東西道路の北側）の確認調査が実施されている。

昭和23年及び昭和36年の調査では、伽藍配置などについては明確にされていない。しかし、平成元年度の県教育委員会による調査では僧房跡と想定される掘立柱建物跡などが検出されている。

この日向国分寺跡の調査は、平成7年度から実施しているが、7年度の調査では金堂のものと推定される掘込事業跡や回廊跡（並行したピット列）、さらに、その回廊の外側に巡らされていたと推定される溝状遺構が検出されている。これらは、いずれも主要伽藍配置に関する遺構で、今まで明確にできなかった主要伽藍配置の一部を特定することができた。

平成8年度はこの結果を踏まえ、7年度検出した遺構の確定及び溝状遺構の範囲を確認するための調査を実施した。

調査の結果、直行した溝状遺構とそれに並行したピット列が検出された。ピットは溝に並行してほぼ等間隔に並んでおり回廊のものであること、また、II地点第1・3トレンチの溝状遺構は、他トレンチ同様回廊の外側巡らされていたものと推定された。このことによって、溝状遺構の東辺が確定されるなど大きな成果をあげている。

本年度は、これらの調査結果を踏まえて、主要伽藍西側と北側溝の確認、主要伽藍内及び周辺の遺構などの有無確認についてという目的をもとに調査を行った。

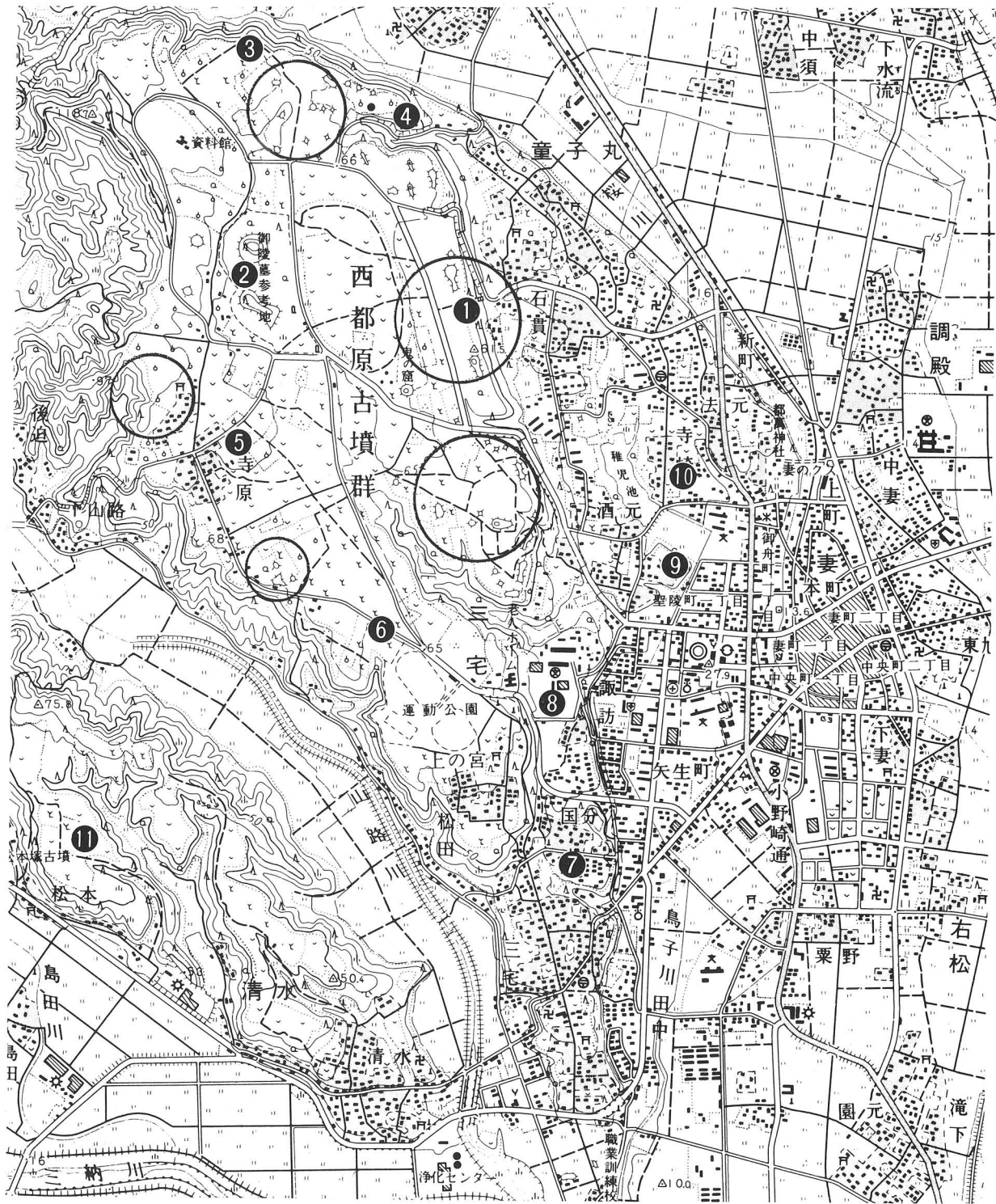
調査区の設定については中央道路西側沿いの北側をA区、中央付近北側をB区とした。また、主要伽藍（推定）外南西付近をC区とした。また、主要伽藍北端を確認する目的でD区を設定し、平成元年度の調査で僧坊跡と推定される掘立柱建物跡が検出された中央道路東沿い北側に、他の建物などの確認を目的としてE区を設定した。（Fig.2参照）

調査の結果、A区から片側3本ずつ計5本の柱穴が検出され、西向き6本柱の主要伽藍に取り付く西門の存在が確認できた。また、西門（推定）北側からは南北にのびる溝状遺構(SE002)が検出され、主要伽藍を取り巻くように溝状遺構が巡っていることが確認できた。

B区からはA区でも確認された後世の溝状遺構(SE001)が検出され、C区からはピットが幾らか検出できたが、建物の存在の可能性は薄いようである。

D区からは柱穴が並んで確認できたが、主要伽藍配置と比較すると東側に振れているため、時期を異にした何等かの掘立柱建物の存在が考えられる。また、北端の溝状遺構は検出されず、主要伽藍の範囲が、まだ北側にのびるのか、その内側に納まるかということが次の疑問となった。

E区からはA・B区同様の東西にのびる溝状遺構(SE001)が確認されたが、後世にかなりの攪乱があったようである。



- | | | |
|-----------|--------------------|-----------|
| 1. 西都原古墳群 | 2. 御陵墓 (男狭穂塚・女狭穂塚) | 3. 丸山遺跡 |
| 4. 新立遺跡 | 5. 寺原第1遺跡 | 6. 原口第2遺跡 |
| 7. 日向国分寺跡 | 8. 日向国分尼寺跡 | 9. 酒元遺跡 |
| 10. 寺崎遺跡 | 11. 松本遺跡 | |

Fig.1 国分寺跡周辺位置図

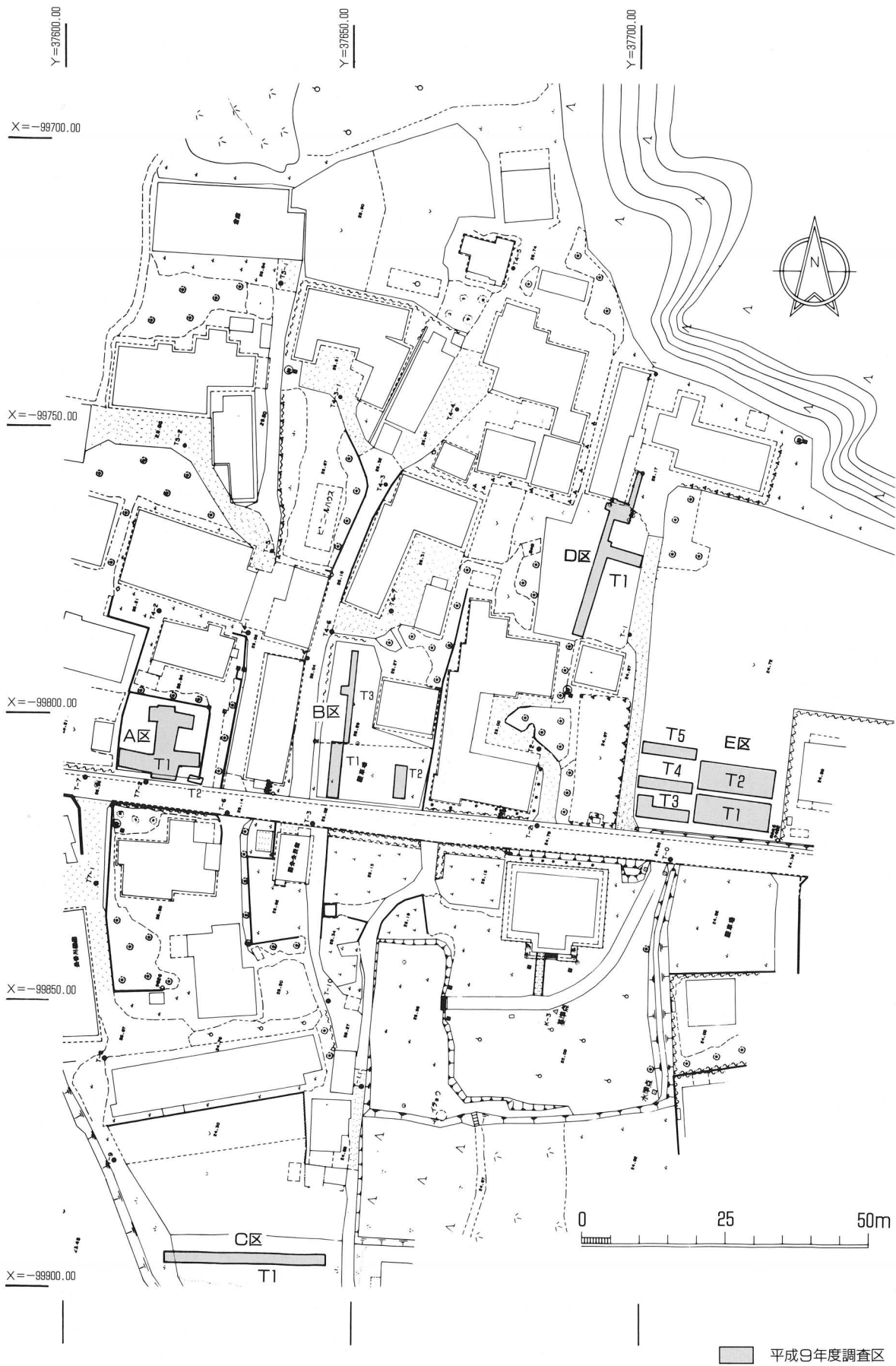


Fig.2 日向国分寺跡現況平面及びトレンチ配置図(S=1/1,000)

第IV章. 遺構と遺物

第1節. 遺構

《A区の遺構》

A区は平成7・8年度に確認されている主要伽藍を取り巻く溝状遺構を確認するため、初め北向逆L字状幅2mのトレンチを東西5m・南北5mの長さで設定し掘削を開始した。

アカホヤ上面でトレンチ東側に径1.3m程の柱穴と、トレンチ北側から南北にのびる溝状遺構(SE002)、南側から後世のものと推定される溝状遺構(SE001)が検出されたためにトレンチを東西南北に拡大した。

その結果、柱穴は東に3ヶ所検出でき、掘立柱建物の存在が予想されたので南側を精査したところ径4本の柱穴が検出された。このことにより、1×2間の門の存在が予想され、A区南東側に第2トレンチを設定し精査したところ、径5本の柱穴が確認できた。残りの1本は予想箇所に柿木が所在しており確認できなかった。

門は東西を出入り口とした西門で柱間は東西が3m、南北が各1.5mで3m四方のものであった。柱穴は径80~130cm程、深さは20~32cm程で、後世に上部をかなり削平されていると思われる。

北側の溝状遺構(SE002)は東西幅100~120cm程、深さは南側の浅い箇所96cm、北側の深い箇所156cmあり南から北へ向かって5°の勾配で傾斜している。この溝の中からは、詳細は後述するように多量の土師器片及び瓦、少量の須恵器片などが出土した。尚、調査は遺跡の所在確認という目的のもとで行っているため、部分的に掘り下げることには止めた。(Fig.3・4 参照)

- | | | | | |
|-------|------------|--------|----------|-------------------------|
| 1. 表土 | 10YR2/3 | 植物根多し | 粘性なし | しまりなし |
| 2. 埋土 | 10YR3/2 | 植物根多し | 粘性なし | しまりなし |
| 2' | 10YR2/1 | 植物根多し | 粘性あり | しまりあり |
| 3. | 10YR7/8 | 植物根少量 | 粘性なし | しまりやあり |
| 4. | 10YR2/1 | 粘性ややあり | しまりなし | アカホヤブロックを含む |
| 5. | 7.5YR2/1 | 粘性あり | しまりやあり | 2~3cm程のアカホヤブロックを含む |
| 6. | 10YR2/2 | 粘性あり | しまりあり | アカホヤブロック3~5cmを含む |
| 7. | 10YR3/2 | 粘性なし | しまりなし | 砂粒・アカホヤを多量に含む |
| 8. | 10YR2/1 | 粘性あり | しまりやあり | 土器片を散らし、瓦片を下層に含む |
| 9. | 10YR1.7/1 | 植物根少量 | 粘性ややあり | しまりあり |
| 10. | 10YR1.7/1 | 植物根少量 | 粘性あり | しまりあり |
| 11. | 7.5YR1.7/1 | 粘性あり | しまりやあり | 砂粒を多く含む |
| 12. | 7.5YR2/1 | 粘性あり | しまりなし | アカホヤの流土と思われる火山灰層 |
| 13. | 10YR1.7/1 | 粘性あり | しまりやあり | 白色粘土・2~3cm程のアカホヤブロックを含む |
| 14. | 10YR1.7/1 | 粘性あり | しまりあまりなし | 砂粒を少量含む |
| 15. | 10YR2/1 | 粘性あり | しまりなし | ATと思われる火山灰・砂を少量含む |

Fig. 3 A区南北構(SE002)北壁土層断面図(S=1/40)

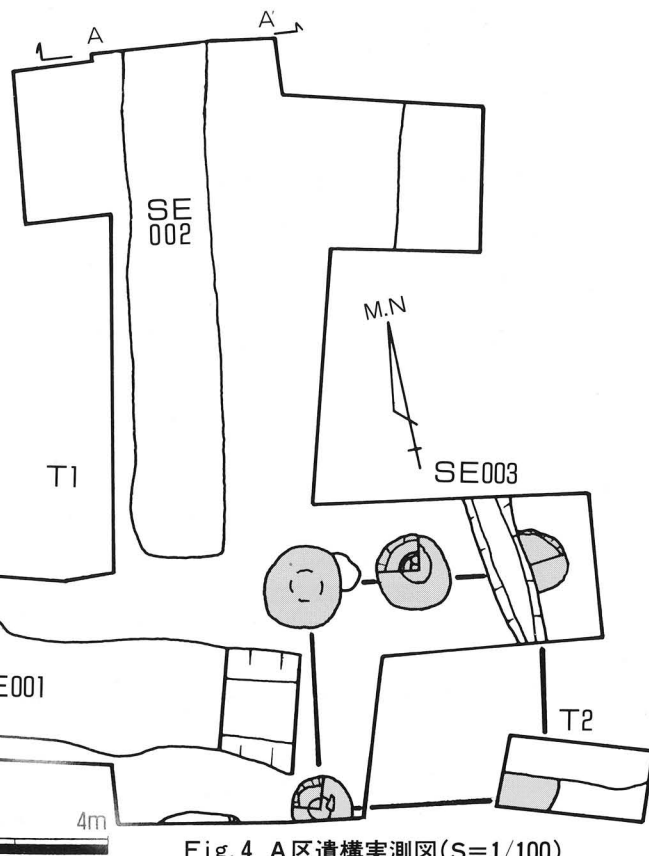
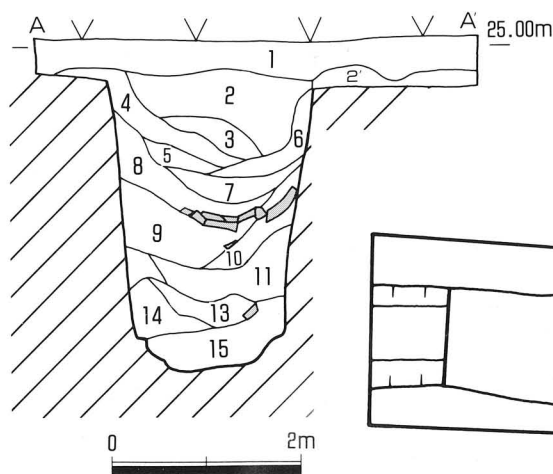


Fig. 4 A区遺構実測図(S=1/100)

《B区の遺構》

B区は平成8年度に確認されていた中央道路に沿った溝状遺構と講堂の所在を確認するという目的で、まず幅2×3mの第1・2トレンチを設定し掘削を行った。

第1・2トレンチとも少量の瓦片が検出され、遺構はA区同様の後世の溝状遺構(SE001)が検出されたのみであった。

講堂の所在を確認するため第1トレンチに取り付くように、幅1m、長さ16mの第3トレンチを設定し掘削を行ったが、不配列のピットが幾らか確認されたのみで、講堂に伴うと考えられる遺構などは確認できなかった。

また、第3トレンチ内北側は後世に民家が建設されたため、かなり広範囲にわたって攪乱されているようである。(Fig.5 参照)

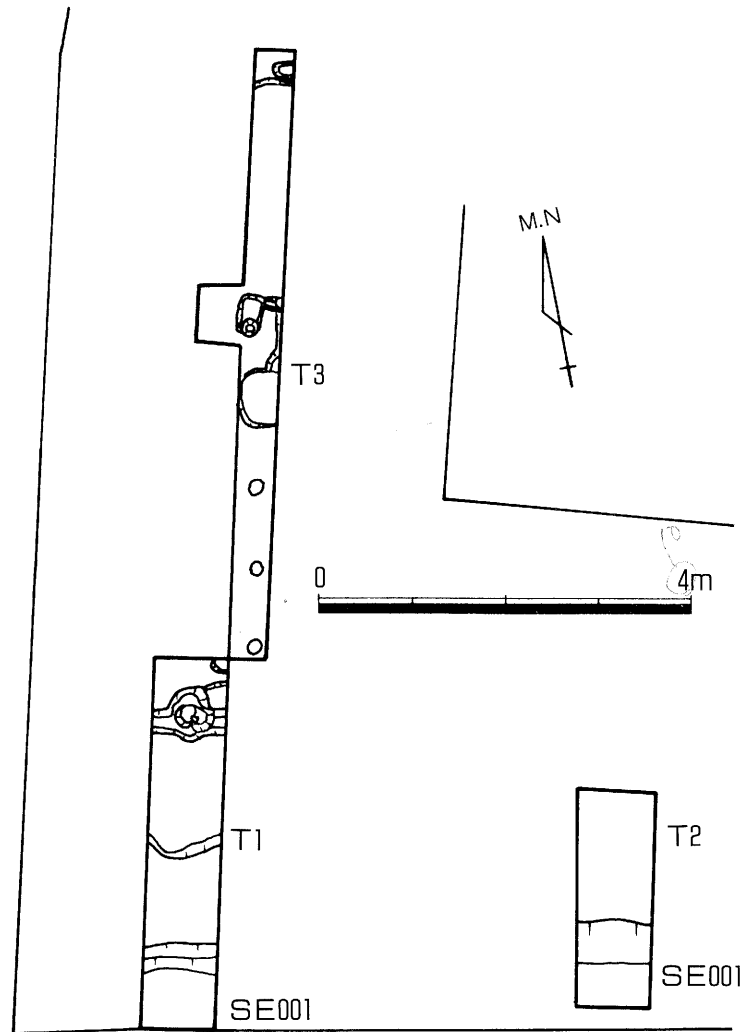


Fig.5 B区遺構実測図(S=1/200)

《C区の遺構》

C区は以前までの調査で、ある程度主要伽藍配置が確認されている主要伽藍外南西部分に幅2m、長さ28mのトレンチを東西方向に設定し掘削を開始した。

調査の結果、多くのピットと溝状遺構(SE004)が検出されたが、掘立柱建物や主要伽藍に伴う溝状遺構と考えられるものは検出されなかった。(Fig.6 参照)

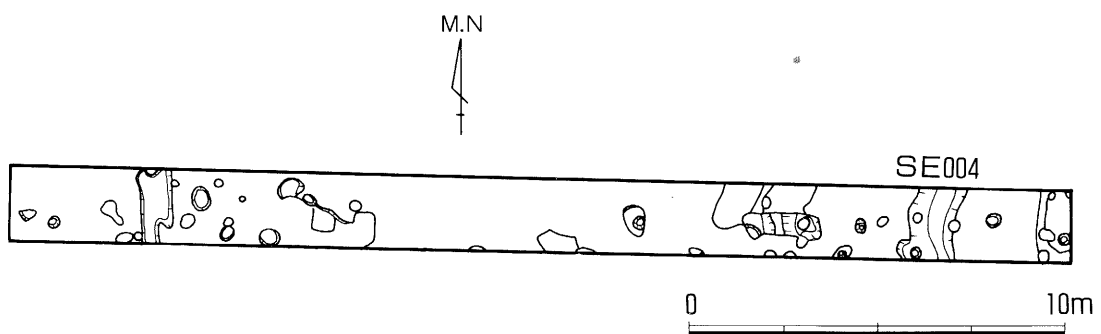


Fig.6 C区遺構実測図(S=1/200)

《D区の遺構》

D区は平成7・8年度の調査とA区で確認された主要伽藍を取り巻く溝状遺構の北東隅を確認するという目的のもと、まず幅2m、南向逆L字状の長さ南北14.5m、東西8mのトレンチを設定し掘削を行った。

その結果、幾つかのピットが確認されたため、トレンチを北側に拡大した。

調査の結果、第1トレンチ北西側から磁北より31°東偏した状態で3個のピット列が検出された。このピット列は、主要伽藍に伴う溝状遺構と比較しても方位を異にするため、時期の異なった何等かの掘立柱建物の存在を推測させる。

また、この調査区からは何条かの溝状遺構が確認されたが、A区同様の主要伽藍を取り巻く溝状遺構(SE002)と思われるものは確認できなかった。(Fig.7 参照)

《E区の遺構》

E区は平成元年度に県教育委員会によって僧坊跡と推定される掘立柱建物跡が確認されており、他の建物などの有無を確認する目的で第1～5トレンチを設定して掘削を行った。第1・2トレンチは5×13m、第3～5トレンチは2×9.5mである。(Fig.8 参照)

調査の結果、第1・3トレンチでA・B区と同様の東西にのびる後世の溝状遺構(SE001)が確認されただけで、遺物も丸瓦片1点、紡錘車1点が検出されたのみであった。

但し、調査終了前に南北溝(SE005)が一部検出された。今後の課題となろう。

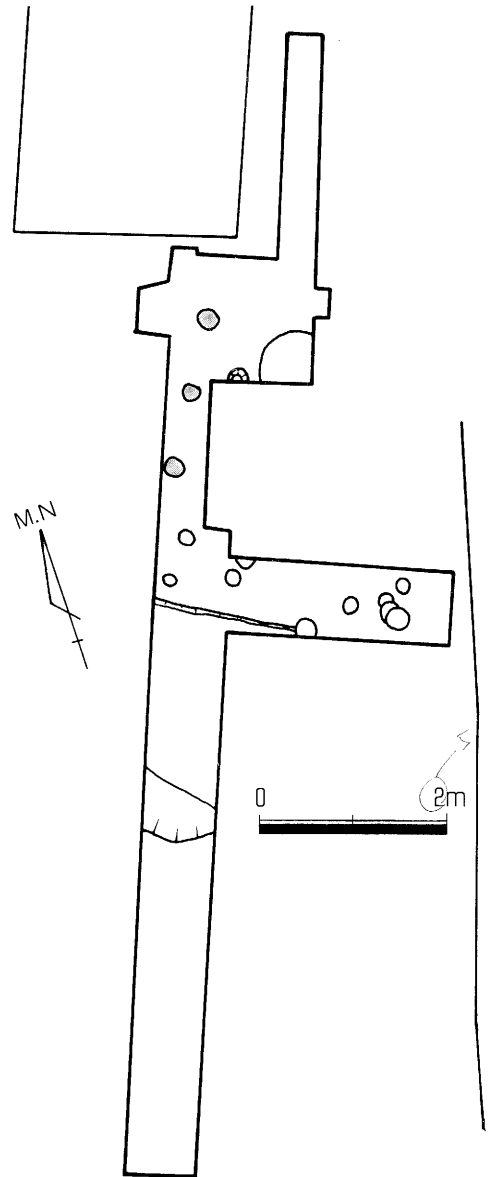


Fig.7 D区遺構実測図(S=1/200)

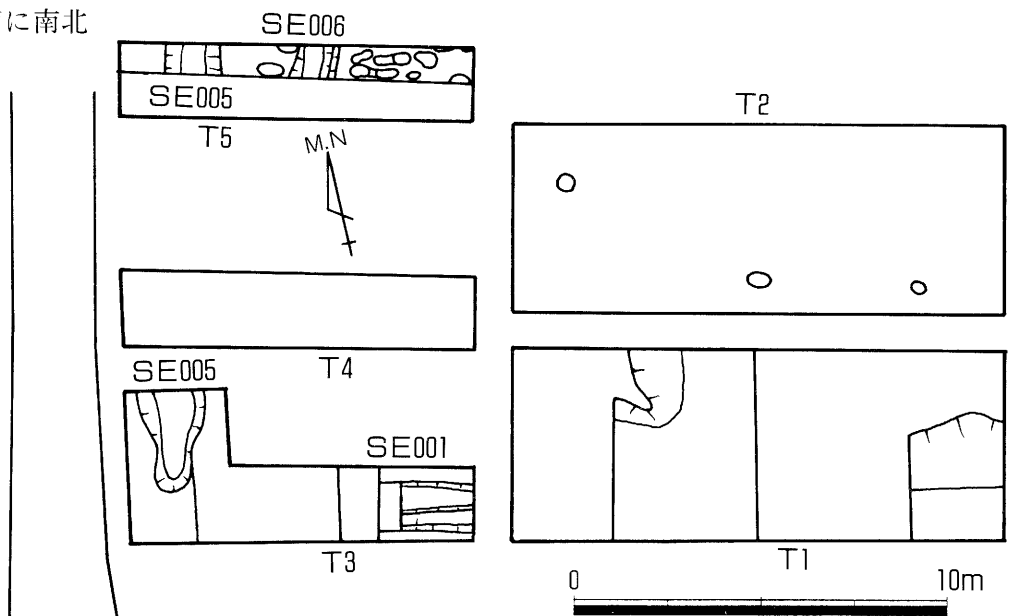


Fig.8 E区遺構実測図(S=1/200)

第2節. 遺物

遺物は軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦などの瓦をはじめ土師器・須恵器・陶磁器・石器・紡錘車などが出土している。総数では約1,620点に上るが、もっとも瓦が多く全体の約80%を占め、1,286点出土している。ここで、記載する遺物はすべてA区北側南北溝(SE002)で出土したものである。

土師器は皿・碗・高台付碗などが出土している。

1は土師皿である。深さは2.1 cmを計る。胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部端で丸まる。底部はヘラ切り未調整で外面はヘラ削り後ナデ、内面は回転ナデ、底部は指オサエ後ナデ調整している。**2**も土師皿である。深さは2.3 cmを計る。胴部から口縁部にかけて外反しながら立ち上がり、底部はヘラ切り未調整で外面はヘラ切り後回転ナデ、内面は回転ナデ、底部は指オサエ後ナデ調整している。**3**は土師碗である。胴部から口縁部にかけて直線的に立上がり、口縁部端より1.4 cm下から若干外反する。底部はヘラ切り未調整で外面はヘラ削り後回転ナデでヘラ調整をナデ消している。内面も回転ナデ調整で底部の指オサエもナデ消してある。**4**も土師碗である。胴部から口縁部にかけて直線的に立上がる。底部はヘラ切り未調整で外面はヘラ切り後回転ナデ、内面も回転ナデ調整で底部の指オサエはナデ消してある。**5**は土師の高台付碗である。胴部から口縁部にかけて直線的に立上がり、内面は回転ナデ、底部は指オサエ後ナデ調整してある。脚は碗部整形後、張り付けてあり両端を地につける。**6**も土師の高台付碗である。胴部から口縁部にかけて直線的に立上がり、口縁部端から5.2 cm下に幅2 mm、深さ0.5 mm程の沈線を施している。脚は碗部整形後、張り付けてあり内側端を地につける。

須恵器は坏蓋・碗・甕・瓶子などが出土している。

7は瓶子と思われる。口縁部は短く外反し、口縁部から8 mm下に明瞭な稜線があり、段を形成している。外面は回転ナデ、内面も回転ナデで自然釉がかぶる。**8**は坏蓋である。摘み部を欠損し大変浅い。直線的に開き、口縁部端は摘み出してあるため、口縁部端より上下3 mmあたりはくびれている。**9**は碗と思われる。胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部端から9 mm下で若干外反する。内外面とも回転ナデ調整である。**10**は甕である。口縁部端から1.8 mm下で大きく外反し、鋭い稜線から下を頸部とする。内外面とも回転ナデ調整である。**11**も甕である。胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。口縁部端はナデのため口縁部端より4 mm下からかなり外反する。内外面とも回転ナデ調整である。(Fig.9 参照)

次に瓦は、そのほとんどが平瓦と丸瓦で、僅かに混在して軒丸瓦と軒平瓦が出土している。また、軒丸瓦は僅かに3点のみで、単弁のものだけである。丸瓦は、玉縁がつくものと行基瓦の2タイプが出土した。

平瓦及び丸瓦には時期を異にしたものが含まれているが、凸面の叩きと凹面の調整などによっていくつかに分類される。大きく凸面の叩きは格子目叩き、縄目叩き・平行叩きに分けられる。さらに、細分すると、格子目叩きは正格子目叩き・長方形格子目叩き・斜格子目叩きに縄目叩きが横位のものと同縦位のものに分かれる。その他、叩き板によるナデ調整のものなども含まれているが、圧倒的に縄目叩きのものが多い。縄目叩きのものには、粗縄目叩きと精縄目叩きのものがあるが、縦位のものにはわりに精縄目叩きのものも多く、丁寧な仕上がりになっている。

12は単弁連華文の軒丸瓦で、外区外縁に鋸齒紋、内縁に珠紋はなく、連弁5葉と連子4個を依存している。器面はかなり剝離が進んでいる。13は単弁連華文の軒丸瓦で、外区外縁に鋸齒紋、内縁に珠紋はなく、連弁2葉と連子1個を依存している。また、瓦当部から丸瓦部も2分の1程依存しており、外面は暗文を施し、内面は指ナデで調整している。14は単弁連華文の軒丸瓦で、外区外縁に鋸齒紋、内縁に珠紋はなく、連弁2葉と連子1個を依存している。15は丸瓦である。今回の調査では丸瓦が13点(瓦片は除く)出土しているが、内2点が行基瓦である。その内の1点である。外面は叩き後、縦方向にヘラ削りによる面取りを行い、横ナデ、その後、桶からはずし外側から切断している。切断面の内面角は斜めに面取りを行っている。また、外面には2条の1周する沈線と2条の1周しない沈線が施されている。内面は布目痕が残り、布合わせの箇所と思われる部分にも沈線が1条依存している。16は平瓦である。ほぼ完形で5cmに11条の縦方向縄目叩きが依存する。桶巻き作りで、内面には布目痕と布目合わせの跡が依存する。桶からはずし外側から切断したため、内面角を面取りしている。(Fig.10 参照)

Tab.1 出土土器観察表

No.	器種	口径	底部径	器高	保存部位	残存率	焼成	色調			胎土
								外	中	内	
01	土師皿	15.2		2.9			やや良	5Y R7/6		5Y R7/6	0.5~2mm程の石英・長石を含む
02	土師皿	14.3		2.4			良好	7.5Y R8/4		7.5Y R8/4	1~2mm程の石英・長石・赤チャートを多量に含む
03	土師碗	12.5		2.3			良好	7.5Y R8/4		7.5Y R8/4	1mm程の黒雲母・長石を含む
04	土師碗	14.7		4.7			良好	7.5Y R8/6		7.5Y R8/6	0.5mm以下の長石を含む (緻密)
05	高台付碗	13.5		5.6			良好	7.5Y R7/4		5Y R7/6	1mm程の長石を含む (緻密)
06	高台付碗	15.6		6.8			良好	7.5Y R8/6		7.5Y R8/6	1~2mm程の長石・赤チャートを含む
07	瓶子	8.2復		-	口縁部	1/4程度	良好(堅緻)	2.5Y R6/1		10Y R6/1	1mm程の黒雲母・長石を含む
08	坏蓋	15.2復		-	口縁部	1/6程度	良好(堅緻)	2.5Y R5/1		2.5Y R5/1	0.5mm程の黒雲母を含む (緻密)
09	碗	14.9復		-	口縁部	1/6程度	良好(堅緻)	2.5Y R6/1		2.5Y R6/1	0.5~1mm程の黒雲母・長石を含む(緻密)
10	甕	22.3復		-	口縁部	1/5程度	良好(堅緻)	7.5 Y 7/1		7.5 Y 7/1	1mm程の長石を含む
11	甕	18.4復		-	口縁部	1/10程度	良好	N4/0		N4/0	かなり細かい石英・長石などを含む(緻密)

Tab.2 出土瓦観察表

No.	器種	長さ	幅	厚さ	保存部位	残存率	焼成	色調			胎土
								外	中	内	
12	軒丸瓦	-	22.8復		外区外縁~中房	1/3程度	やや良	10Y R8/2	2.5Y R6/1	10Y R7/3	1~2mm程の長石・赤チャートを含む
13	軒丸瓦	-	19.6復		外区外縁~中房	1/4程度	良好	7.5Y R8/1	5Y R6/3	7.5Y R7/3	1mm程の長石・赤チャートを多量に含む
14	軒丸瓦	-	20.6復		外区外縁~内区	1/8程度	良好	7.5Y R8/1	5Y R6/3	7.5Y R7/3	1mm程の黒雲母・長石・赤チャートなどを含む
15	丸瓦(行基)	33.5	18.0復	3.5		4/5程度	良好	7.5Y R8/2		7.5Y R8/2	1mm程の長石を含む (緻密)
16	平瓦	38.8	27.5	3.2		ほぼ完形	やや良	10Y R8/3		10Y R8/3	1mm程の長石を含む (緻密)

※復は反転復元により求められた数値によることを示す。

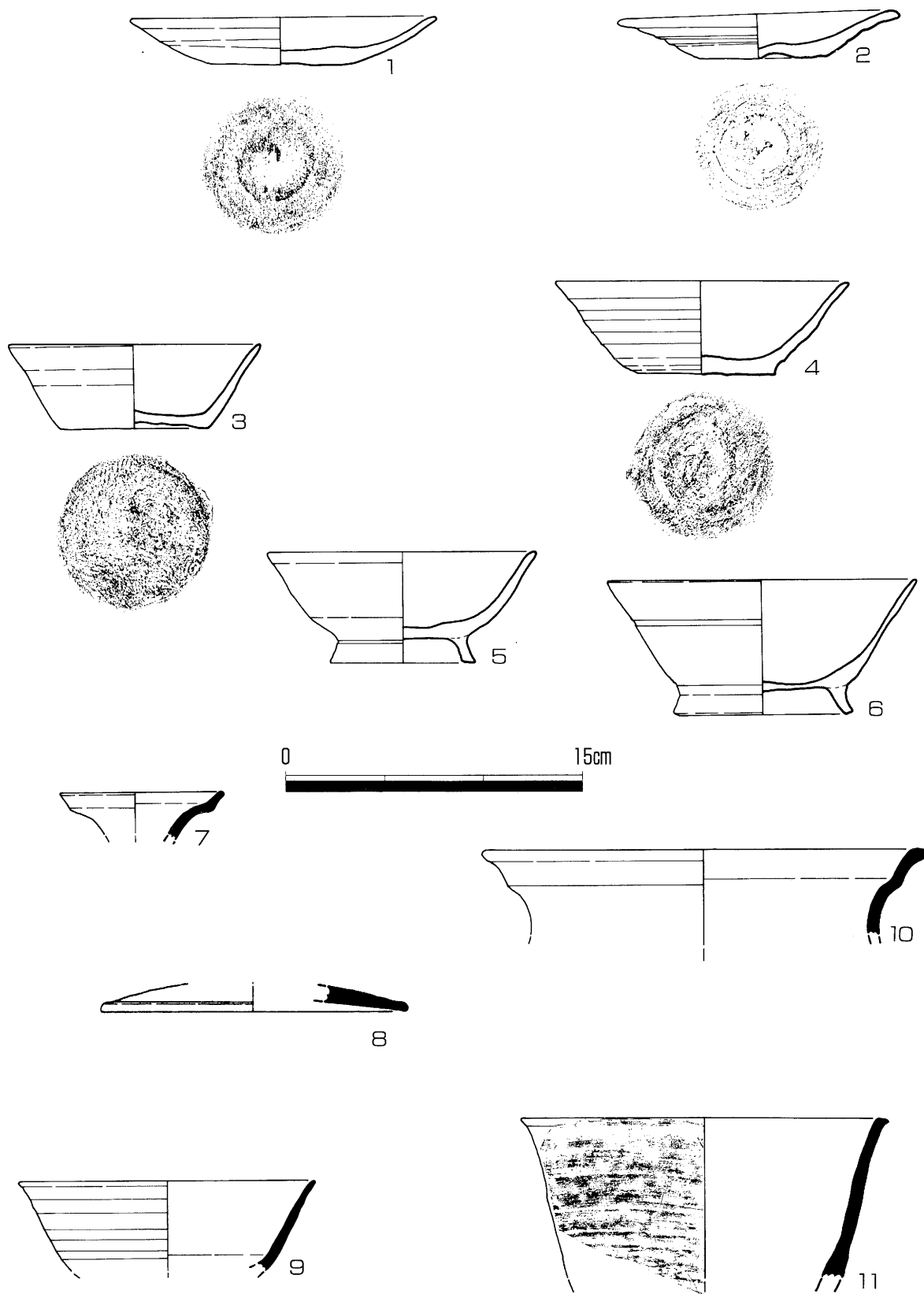


Fig.9 A区南北溝(SE002)出土土器実測図(S=1/3)

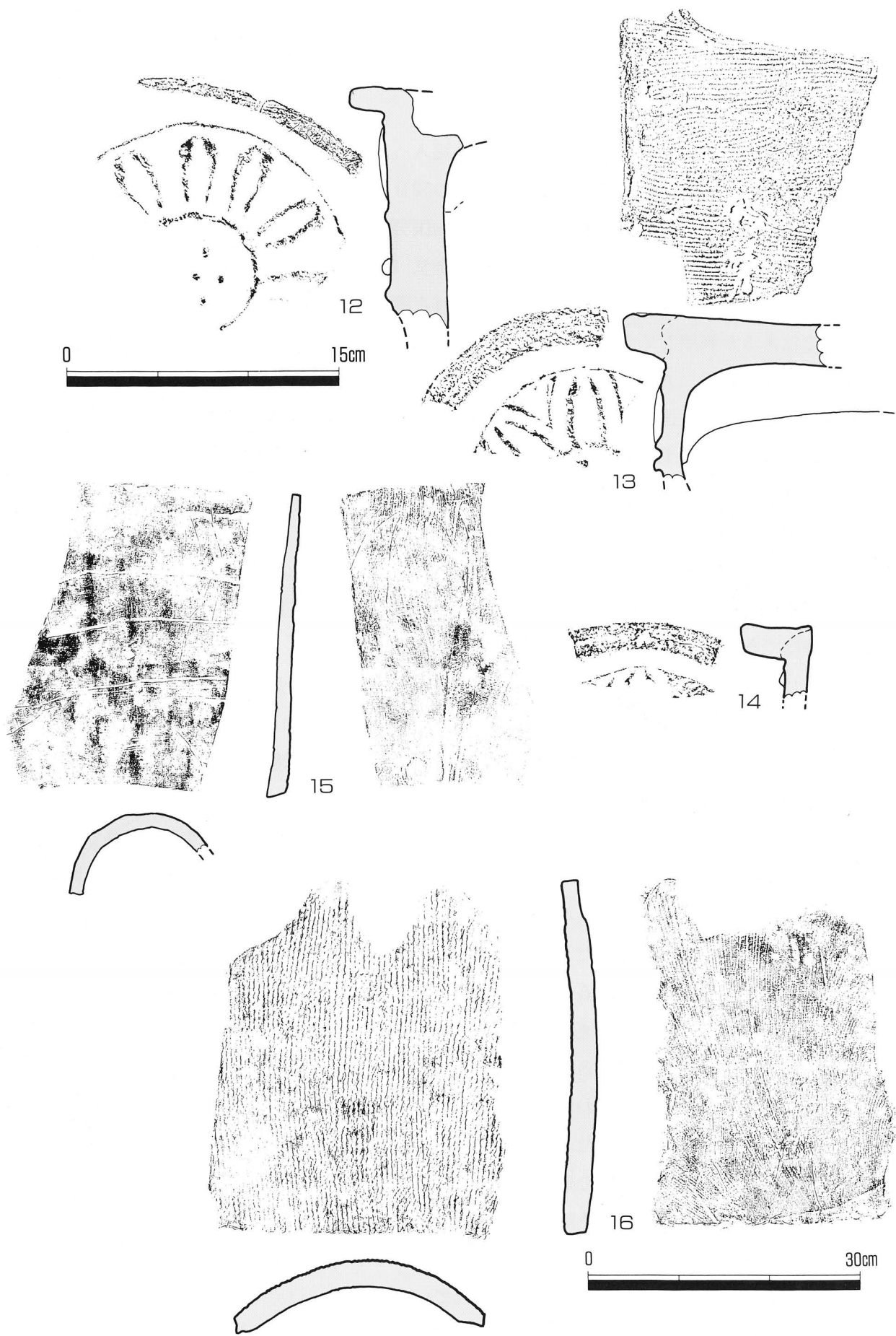


Fig. 10 A区南北沟(SE002)出土瓦实测图(12~14. S=1/3, 15·16. S=1/6)

第V章. ま と め

本年度の調査は、開発事業に伴う発掘調査が急遽入ったために、平成9年6月17日から平成10年3月6日までの長期間になった。実質は、この内の52日間を調査対象日として行った。

西都市教育委員会が、国庫補助を受けて行う日向国分寺跡の調査は、本年度の調査で第3次になる。今まで平成7・8年度の調査で主要伽藍内の金堂（推定）の堀込地業跡や主要伽藍の回廊跡、さらにその回廊の外側に巡らされていたと推定される溝状遺構が検出され、主要伽藍の規模と配置がわずかではあるが判明してきた。

本年度の調査の結果、A区では主要伽藍に取り付く1(3m)×2(各1.5m)間で6本柱の西門跡が、また、西門検出地点の北側から深さ96～156cmの南北にのびる溝状遺構(SE002)が検出された。この溝状遺構からは、完形の土師器や平瓦が多数、また、須恵器片や行基瓦などが出土した。

また、B・E区から東西に走る後世の溝状遺構(SE001)が確認され、平成8年度までは金堂に取り付くように巡っていたと推定されていた回廊外側の溝状遺構が、実際は後世のものであり、当時のものではないことが確認できた。このことは、A区で検出された西門（推定）の出入り口の中央をのびる溝状遺構(SE001)が、位置、形態、遺物などから、B・E区で検出されたもの同様の溝状遺構と確認できたことから明らかである。

このことにより、当時の溝状遺構は、講堂をも含むように主要伽藍に沿って巡っていたのであろうと考えられる。

また、平成8年度の調査で日高正晴氏が、この溝状遺構を雨落ち溝と考えられ、「雨水が集中的に、回廊の外側にながれるような屋根組の構造になっていたのかもしれない」

という指摘は、今回の調査で、この溝状遺構(SE002)から検出された瓦の状態や量から見ても頷ける。

ところで、本文中には詳細にしなかったが、A区北側の溝状遺構(SE002)の東側からは、回廊のものと思われる柱穴列が検出されていない。このことで、金堂より北側は回廊部分が築地構造であったとも考えられる。しかし、築地だとすると、基段部分をもっと版築された強固なものになっており、瓦なども検出されると思われるため、ここでは可能性とだけに止めておきたい。

この調査では、アカホヤ上の黒色土で遺構検出を試みたが不可能であり、アカホヤ上面を遺構検出面とした。西門を構成していると考えられる5本の柱穴も20～32cmと浅かったため、かなり上面を削平及び攪乱されていると思われる。従って、今後北側の調査がより進展して行けば、より明白になるであろうと思われる。また、D区は平成8年度の調査で中門(推定)、金堂、回廊東南端の検出により、主要伽藍の範囲が中心から東に42m、南北に54mと予想されていたため、主要伽藍北端をこの地点に想定してトレンチを設定したが確認できなかった。

このD区からは、上記したように、時期を異にしたピット列が検出され、県教育委員会による平成元年度の調査では弥生時代の住居跡も確認されている。

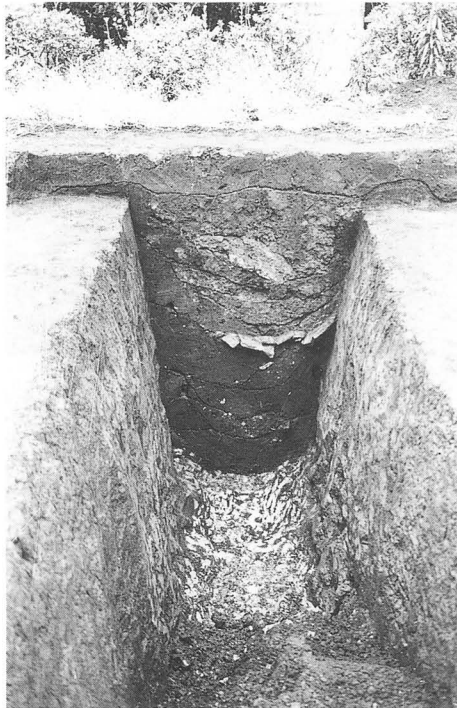
このことにより、この寺域内は国分寺創建期、盛行期、衰退期以外の前後の時代にも、現在の状況からかなりの建造物や生活空間が広がっていたであろうことが推察される。

圖 版

(P L A T E S)



1. A区西門柱穴検出状況(北東より)



2. A区南北溝(SE002)北壁土断面(南より)



3. A区南北溝(SE002)遺物検出状況(東より)



4. B区第2トレンチ遺構検出状況(北東より)



1. B区第1・3トレンチ遺構検出状況(南より)



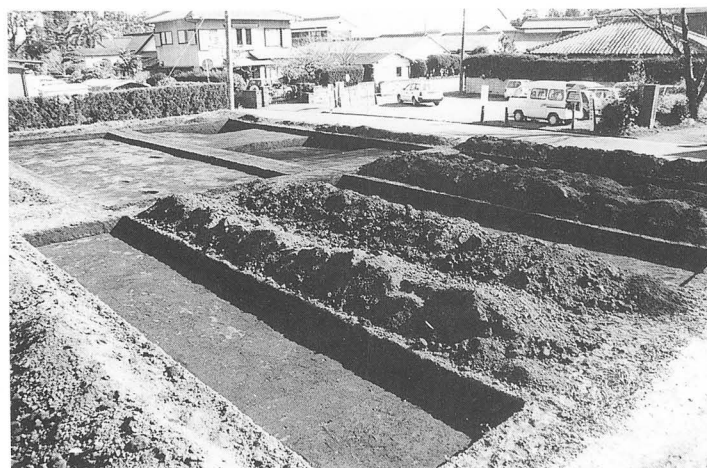
2. C区第1トレンチ遺構検出状況(西より)



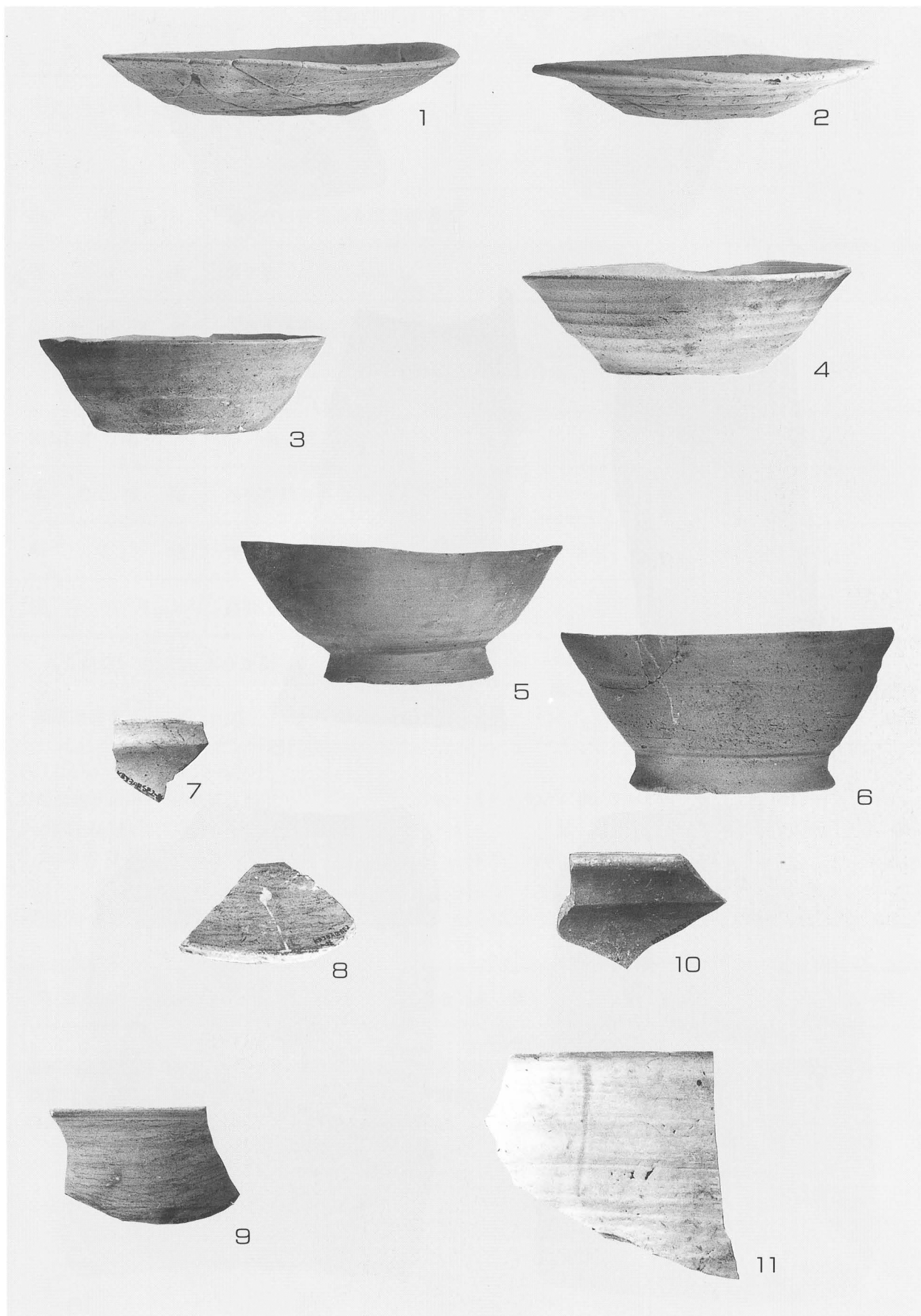
3. D区第1トレンチ遺構検出状況(南西より)



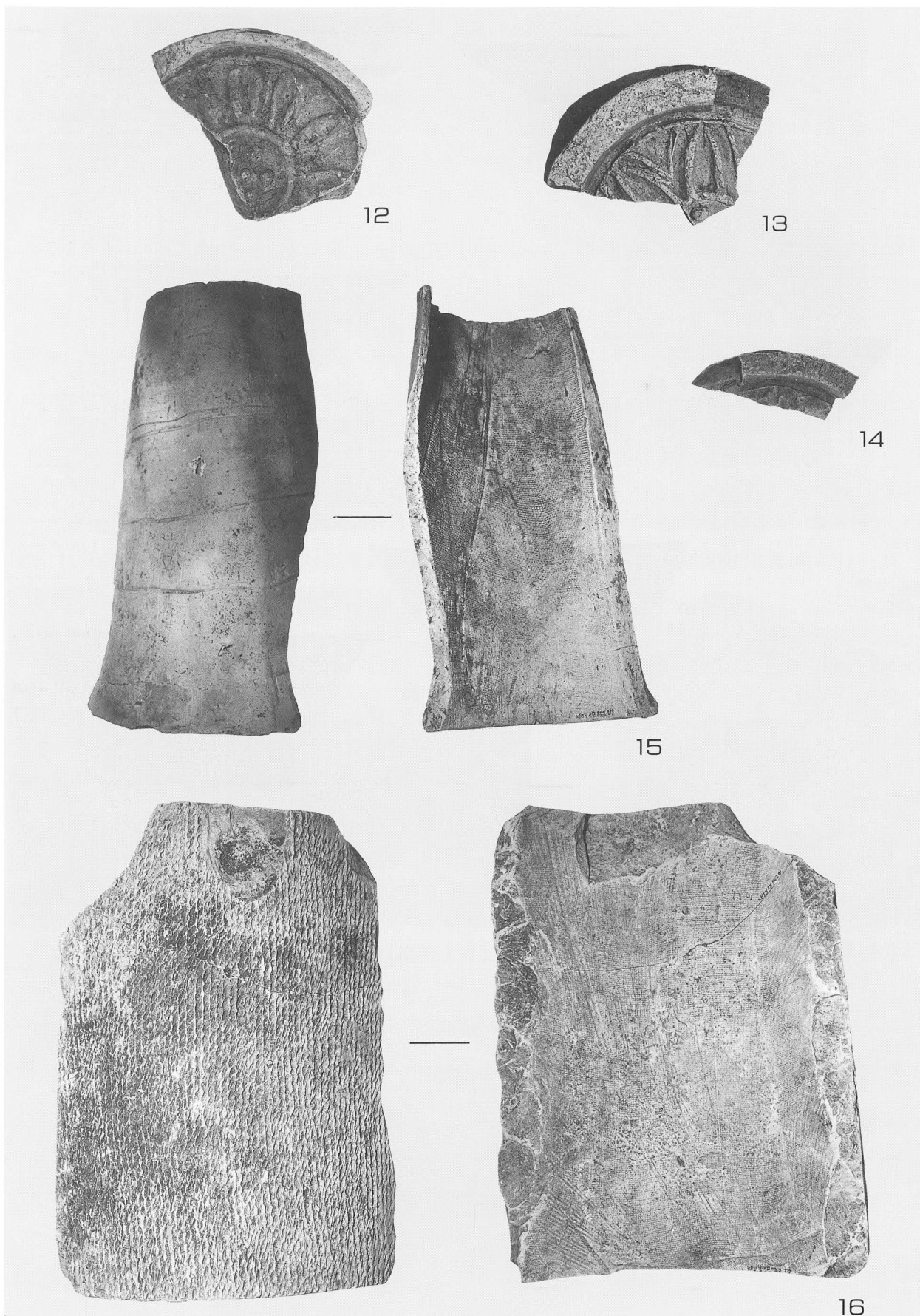
4. D区第1トレンチ遺構完掘状況(南西より)



5. E区遺構検出状況(西より)



PL. 3 A区南北溝(SE002)出土土器



P L . 4 A区南北溝(SE002)出土瓦

報告書抄録

ふりがな	ひゅうがこくぶんじあと						
書名	日向国分寺跡						
副書名	市内遺跡発掘調査概要報告書						
巻次	第3集						
シリーズ名	西都市埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	第27集						
編著者名	釜瀬明宏						
編集機関	西都市教育委員会						
所在地	〒881-8501 宮崎県西都市聖陵町2丁目1番地 TEL 0983-43-1111						
発行年月日	西暦 1998年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
さいとばるちくいせき 西都原地区遺跡 ひゅうがこくぶんじあと 日向国分寺跡	みやざきけんさいとし 宮崎県西都市 おおあざみやけあざこくふ 大字三宅字国分		1008	X = -99750.00) X = -99900.00	Y = 37600.00) Y = 37750.00	19970617~ 19980306	320
調査原因	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
遺跡所在確認 調査に伴う発 掘調査	国分寺	奈良～平安	推定主要伽羅西門跡 推定回廊跡 溝状遺構 5条		軒丸瓦・軒平瓦 丸瓦・平瓦 土師器皿・碗 土師器高台付碗 須恵器 陶磁器	主要伽藍配置の一部 を確認	

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書 第27集

日向国分寺跡

平成10年 3月31日発行

編集発行 西都市教育委員会

印刷所 なかむら印刷所

